

てきて、融合分野での研究や共同研究をしようという機運が高まっているように感じています。

さらに、「データ駆動型サイエンス創造センター」と新設の「デジタルグリーンイノベーションセンター」という分野横断的なセンター

大学ごとの個性を活かした発展を

——大学の経営運営について、改革、改革と言われ続けて三〇年になりますが、大学改革の方向性についてお考えをうかがいます。

学長 「改革ありき」になっっていることは、日本独特の現象ではないでしょうか。アメリカで大学改革、大学改革なんて叫んでいるのは聞いたことがありませんから。もちろん、例えば日本の研究力の低下とか、あるいは次世代のリーダーになるような大学院生の減少による研究力の先行き不安、あるいは企業のイノベーションの基になるように大学が生かされていない等々、いろいろな問題点がありますので、なんとかしなければいけないという社会の熱意もあると思います。今の状況より良くしていくことは大事だと思えますが、その際に「改革ありき」で改革が目標になってしまうのはやはり逆なのではないでしょうか。そういう風景が見えることは残念だと思っています。

また、国立大学といっても特定の役割を持つようにつくられた大学もあり、全ての大学もある。テーマに関係するたくさん情報をそれぞれ評価しながら集めていく能力が必要になります。

次のステップは、集めてきた情報から自分で仮説を考えます。集めてきた情報に矛盾しない仮説を作る能力になります。仮説をつくったら、次はその仮説を検証する能力が必要です。そのための実験をデザインしたり、どうやったら検証できるか、検証方法をデザインして実行する能力が求められます。実験をしたら結果が出てきますから、その結果を解釈して、自分の仮説が正しかったかどうかを検討する、あるいは論理的に結論を出す能力が必要です。

このように研究というのは多面的な能力を必要とするので、大学院で研究を経験する、あるいは自分で研究をしていく能力を身につけることは、実は学問の世界だけでなく、社会のいろいろな場面で非常に役に立ちます。つまり、研究そのものでトレーニングしているのが大学院の教育ということになります。

本学が素晴らしいのは、この研究を極めて高いレベルで、かつ最先端のところでやっているということだと思います。したがって、研究に必要な多面的な能力を非常に高いレベルで身につけることができます。高い研究レベルの中で、高いレベルの教育をするのが、本学の特徴であり、これは今後も変わりません。

それから、先ほどお話ししたように、分野ごとに分かれていた三研究科が一研究科に統

ターを設けて、これまで分野ごとに分かれていた教員が一緒に研究をする、あるいは教育をするという仕組みを設けたことによって、全体が一つの研究科として機能する方向へと、いい流れで融合が進んでいると感じています。

が同じものを目指しているわけではないから、国立大学というだけで同じ評価基準

研究をすること自体がトレーニング——大学院教育

——奈良先端科学技術大学院大学の特色ある教育研究についてうかがいます。

学長 研究力について本学は、例えば教員一人あたりの科研費の獲得額、あるいは論文数についても国内トップレベルの非常に高い生産性を誇っています。その高い研究力のもとで、学生自身が研究に参加することによって、研究に必要な多面的な能力をトレーニングしているのが本学の特徴だと考えています。

——教育についても第三期中期目標期間の中間評価でトップ二校に入るなど優れた評価を受けていますね。

学長 よくお話しするのでですけど、小学校から大学までどうしても授業を聞いて、知識を学ぶことが中心になりますが、大学院では基本

合されたことで、分野間の交流が高まっています。その中でより学生の教育の幅も広がっていくことを目指しているところです。新型コロナウイルス感染症にしても、さまざまな地球的、社会的な課題というものは一つの専門分野で解決できるものではありません。結局いろいろな分野の人が力を合わせて取り組んでいかねばなりません。その中で活躍できる人

データ駆動型サイエンスで次のステージに進む

——「データ駆動型サイエンス創造センター」と「デジタルグリーンイノベーションセンター」についてうかがいます。

学長 「データ駆動型サイエンス創造センター」は二〇一七年、ちょうど一研究科体制がスタートする前年に設立されています。このセンターをつくったのは、もちろんデータサイエンスやDXなどの時代の要請に応じるためですが、それと同時にAIによる新しい研究アプローチが生まれてきたということがあります。それは先ほどお話しした仮説を立てて検証するというあり方とはまた異なり、大量のデータの中からコンピューターの力を借りて仮説を引き出してくるというデータ駆動型サイエンスです。そして、これは特定の分野に限られたアプローチではありません。さまざまな分野に適用することができ、大きな影響を与えるサイエンスの新しいやり方

にすることはできないと思います。それを同一の基準で評価すれば苦しむ大学が出てくるのは当然です。設立の経緯の違いや立地する地域も含めて、それぞれの地域での教育、研究、あるいは地域との連携を担う役割があり、それぞれ個性的な、それぞれの方向性で発展すればいいというのが、おそらくもとの前提だったと思います。それが蔑ろにされるとすれば残念です。結局、評価基準に幅がないことが、各大学がユニークな発展をしていく上で障害になっているのではないかと感じているところです。

的には教える教員ですら知らない最先端の知見を自分で見つけ出していく、つまり研究をすること自体がトレーニングになっていると思います。

それには複数の能力が必要になります。まずは自分で研究テーマを設定しなければなりません。いざ研究をするというときに実際に取り組むことのできるテーマを設定するのは非常に難しいことなのです。

研究テーマを設定したら、次はそのテーマについて情報収集をしなければなりません。そのテーマについて現在、何が知られているのか。また、集めた中には信用できない情報もあるし、信用度の高い、確実性の高い情報

材は、自分自身の専門分野について、もちろん高い研究力を持つていなければなりません。それに加えて他の分野のこともある程度知っていて、いろいろな専門家ともコミュニケーションでき、共創できる人材です。いろいろな分野の教員が一つの研究科の中で教育研究を行うことによって、そういう人材を輩出していくための環境を整えていきたいと考えています。

す。これを分野融合の一つの柱としていくということだと思います。このセンターの設立は本学がさらに次のステージに進むための大きなステップだったと思います。幸い本学の場合は情報科学に強みがあり、このセンターをつくる下地がありました。

さらに、ここを教育の場としても活用した教育プログラムを設けました。データ駆動型サイエンスで分野横断的にアプローチすることによって、一研究科に統合された教員や学生の分野横断型の交流をさらに促進する効果もあり、非常にうまくいっています。

「デジタルグリーンイノベーションセンター」は今年から設けました。本学はもともと植物科学の分野で世界トップレベルの研究を行っていますので、その強みを生かすと同時に、それをデータサイエンスや物質科学と組み合わせることによって、さらなる強みが

つくれるのではないかとことを考えました。デジタル技術を駆使した次世代のグリーン科学技術を創造し、その成果を社会実装につなげることでSDGsに貢献していきたいま

全学生の4分の1が留学生

国際交流についてうかがいます。

学長 国際化には早くから取り組んでいて、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」にも採択されています。海外のパートナー校の推薦する優秀な留学生を受け入れているほか、英語のカリキュラムを充実させており、日本語をまったく知らなくても英語で授業や研究指導を受け、英語で学位審査を受けて学位を取得できる制度を早くから整備しています。

全学生の約四分の一が留学生で、ほぼすべての研究室で留学生と日本人学生が肩を並べて研究に取り組んでいます。これは一緒に学ぶ日本人学生にも非常にメリットがあつて、日本にいながら、海外で文化的なバックグラウンドが違う人と一緒に研究をするような経験ができるわけです。本学は大学院ですけれど日本人学生は英語が必修科目になっており、TOEICなどで語学力のチェックもしています。かつ各研究室で留学生たちと英語で交流し、一緒に研究をします。また、日本人学生を海外に送り出すための費用を大学が負担するなど、国際的に活躍できる人材を育

す。また、このセンターにも教育プログラムを併せて新設し、融合分野での教育研究のセンターとして、学内全体の新たな分野横断型の共創を進めていきたいと考えています。

てる取り組みも長年続けてきました。

自治体と初めての包括連携協定を締結

地域社会貢献の取り組みについてうかがいます。

学長 学長ビジョンに「社会との共創の輪の拡大」を掲げていますが、まず拡大すべきは足元の地域です。一つは、けいはんな学研都市との連携です。学研都市推進機構とどう連携し、京阪奈の地域や企業とどう共創していくか。本学としてはスマートシティの取り組みにおいて貢献できるのではないかと考えています。もう一つは、生駒市と包括連携協定を結びました。本学としては初めての自治体との包括連携協定となります。新型コロナウイルス感染症のワクチン接種においても、生駒市から医師や看護師を派遣していただくことで実施することができましたし、これまでも本学はいろいろな形で生駒市からご支援をいただいています。また、本学からは市立中学校への出前授業などいろいろな取り組みをしてきましたが、この連携をもっと広

学の女性教員の割合は現在一一％です。研究者の多様性が科学研究を推進するのに重要だということは私自身、二十年近い米国内での研究生生活の中で目の当たりにしてきました。やはり多様な人たちがいることで違った視点が生まれ、新しいアイデアや発想を生み出すわけで、大学の研究力強化のためには、均質なグループではなく多様性が必要で

日本の理工系には女性が少なく、本学としてもなんとか女性研究者を増やしたいと考えています。「学長ビジョン・イニシアティブ」と名づけた事業の一つとして、テニユア・トラック准教授の女性限定公募を行っています。広

学内広報が広報の第一歩

広報活動についてうかがいます。学内広報を強化していることですかね。

学長 アメリカの大学の学内広報は活発で、教職員あるいは学生に向けて、うちの大学はすごいんだよというメッセージを常に発信していました。それによって教職員や学生が自分たちの大学に誇りを持つことができ、それが大学のいいイメージとなって家族や友人にもさざ波のように広がっていくわけです。私は「足元からの大学ブランディング」と言っていますけど、しっかりとした学内広報が大学ブランディングの第一歩であるというので、学内向けのニュースレターをつくりました。いいニュースを学内で共有すると

く先端科学技術分野の研究者を対象に、将来の教授候補を発掘しようというものです。独立して研究できる環境を作ろうということ、研究チームを主宰するためのスタートアップ資金一、〇〇万円に加え、さらに研究補助として博士研究員の雇用経費も支給するなど手厚い支援を用意しています。

また、男女共同参画室を中心にいろいろな取り組みをしています。例えば、子育てと教育研究活動の両立を支援する勤務制度を整備し、啓発活動を実施することで、「子育てサポート企業」であることを示す「くるみん」認定を取得しています。

いうところから始めて、それによってコミュニティに誇りを持つてもらおう。

もう一つは外に向かっただけの広報ですが、本学の場合は知名度を高めることが一つの大きな課題です。大学院大学は大学入試の対象にならないこともあって、なかなか世間一般の知名度が上がりにくい。そこをどうやって打破していくかということですが、

システムティックに広報をしていかなければなりません。一つは本学に進学してもらうための大学生・高専生・社会人に向けた入試広報、それから大学として社会にアピールするための広報を進めていく必要があります。そのためにプロジェクトチームをつくら

げて、地域の課題解決に本学が貢献することはできないか、生駒市と検討しながら実質的な連携を進めていこうということで協定を結びました。これからの拡大と深化を楽しみにしているところです。

大学院生に特化した優れた就職支援体制

学生支援について、特に就職支援の取り組みについてうかがいます。

学長 本学の大学院生に対する就職支援は、ずば抜けていると思います。他大学では大学院生の就職に特化した就職支援体制はなかなか難しいと思います。また、日本人学生だけでなく、留学生の就職支援も行っています。かつ修士、博士、あるいはすでに学位を取得して研究員として働いているポストドクも含め、個別対応をしながら、キャリア支援室が充実したサポートを行っています。特に海外企業で勤務経験のある教員が国際的な企業や海外企業への就職支援あるいは紹介等を行うなど、国際的な就職支援もできる体制になっています。

テニユア・トラック制で優秀な女性研究者を支援

女性研究者支援の取り組みについてうかがいます。女性研究者の割合は今どのくらいですか。

学長 女性研究者を増やそうということ、今多くの大学が必死になっています。本

ていろいろ議論をしました。一つには、これまで広報を担当する部署が分散していたのを、いかにして大学として一体的な広報戦略をつくっていくか。もう一つには、教員や事務職員が考えるだけでなく、広報の専門家の視点が必要ではないかということです。

そこで大手広告代理店に勤務されていたプロの方を特任教授として招き、本学の広報活動に横串を通してもらうと同時に、全学的な戦略を立てて広報活動を効果的に進めていくと取り組んでいます。

学長は大学の顔

学長のリーダーシップと大学のガバナンスについてお考えをうかがいます。

学長 学長には学外に向けての顔という役割があると思います。学外に大学をアピールできるような学長の姿というのはリーダーシップの面でもガバナンスの面でも重要だと思っています。

それと同時に学内のリーダーシップあるいは学長の役割というのは、特に本学のように力のある研究者がそれぞれ個性を発揮して素晴らしい教育研究をしているという状況の中では、コーチとして学内の人たちを応援していくのがいいのではないかと考えています。力を発揮してもらおうための環境を整えて、学内をいかに盛り上げていくか。そういうかたちのリーダーシップが望ましいだろうと思っています。